

1. ジグムント・バウマンの生涯と、問題関心の変遷について

ジグムント・バウマンは、1925年にポーランド西部のポズナニという貧しいユダヤ人の家庭に生まれた。その後、1939年には第二次世界大戦の勃発とともに、バウマン一家はナチスを避けてソ連に移住し、当地の大学で教育を受けることになった。43年にはポーランド陸軍に入隊し、45年の終戦後は、ポーランド労働党に入り、社会主義を信奉するようになった。53年には、反ユダヤ主義が高まる中、父親がイスラエル移住を照会したことが原因で軍隊を罷免され、ここから社会学者への道を歩んでゆくこととなった。54年にはポーランドのワルシャワ大学で博士号を取得し、哲学・社会科学部講師のポストを得た。しかしながら、その後第三次中東戦争の余波の中で、反シオニズムの高まりを受けて、ジグムントは大学を解雇されてイスラエルの移住を余儀なくされた。その後、各国を転々としながらも、71年にはイングランドのリーズ大学へ移り社会学部教授として教鞭をとることになった。90年にはリーズ大学社会学部教授を辞職し、現在に至るまでリーズに住んでいる。

バウマンは現在に至るまで、数々の著作を残しており、また日本語訳の本が限られているので、バウマンの問題関心の変遷と共に簡単に見ていくことにしたい。バウマンの思想の分水嶺は1980年代後半に書き残した三部作でもある、「立法者と解釈者」（1987年）、「近代とホロコースト」（1989年）、「近代とアンヴィヴァレンス」（1991年・日本語訳なし）を書きつつあった時であり、東ヨーロッパとソ連における国家社会主義が崩壊したときである。

国家社会主義が崩壊したことによってバウマンの焦点は社会主義と資本主義の区別から、モダニティとポスト・モダニティの区別へと移っていった。そして、バウマンが達した結論は、これまで彼が強く信奉していた社会主義のプロジェクトも含めて、モダニティが失敗する運命にあるということであった。

近代とホロコースト（1939年）では、モダニティ批判が展開されている。この著作をまとめると、ナチスによるユダヤ人のホロコーストは、近代合理社会の中で、文明が高度な段階に達し、人類の文化的達成が頂点に至ったときに起こったのであるから、決してヨーロッパの反ユダヤ主義の長い歴史の産物によるものではなく、それは近代特有（社会、文化、文明）の現象であると述べている。ホロコーストを可能にしたのは、人間的主体の実存的様式である、他者に対する責任。換言すれば、対人関係の最も純粋な基本構造である道徳（道徳の本質は他者に対する義務であり、それはあらゆる利害関係を超越している）を欠如させ、喪失させることによってであった。この道徳を喪失させた要因こそが、ナチの政治体制が採用した、近代の産物である、社会工学的な設計主義、技術主義、合理主義、官僚主義によるものであった。よって、ホロコーストはユダヤ人のみに限定された問題で

はなくて、国家がこのような近代的な社会構造^{※1}を備えている限り、引き起こされる可能性があるとバウマンは結論づけたのである。

分水嶺以降現代に至るまでのバウマンの問題関心は、モダニティと、ポスト・モダニティのダイナミックな関係を探ることに移行していった。2001年にリキッド・モダニティが出版されてから、ポスト・モダニティという言葉よりも、リキッド・モダニティという言葉を用い始めた。また、近代とホロコーストで述べられていたように、近代以降なおざりになった道徳的主体の構築を主要な問題として設定するようになった。

※1 構造とは相対的反復性、出来事の単調性のことである。認識論的にいえば、それは予測可能性を意味する。蓋然性が規則的に配置された空間をわれわれは構造という。

2. モダニティからリキッド・モダニティへの変遷

バウマンは、2001年にリキッド・モダニティという著作を発表し、「リキッド・モダン（流動的近代）社会とは、そこに生きる人々の行為が、一定の習慣やルーティンへと（あたかも流体が固体へと）凝固するより先に、その行為の条件のほうが変わってしまうような社会のことである。」と述べた。この本に従って、モダニティからリキッド・モダニティの変遷過程をまとめると以下のようなになる。

リキッド・モダニティ以前の、モダニティでは、前近代の堅固なものを溶解することによって、永続性をもつ堅固さを発見しよう（真理の探究）という強い意志があった。

堅固なものを溶解するということは、合理性を邪魔する不適切な義務（例えば、仕事を家事や家庭に対する倫理的義務から解放する）を払拭することだった。また、堅固なものの溶解は複雑な社会のネットワークを解体し、経済中心の行動規制に対して無抵抗なものとした。堅固なものの溶解によって開かれた領域は、人間が道具的理性、あるいは経済の絶対的役割に侵略された。また、堅固なものの溶解によって経済は伝統的な政治的、倫理的、文化的束縛から解放された。そして、新たに経済に主眼をおく新たな秩序が固まっていた。この秩序は秩序を脅かす非経済要素の消滅により、旧秩序よりもさらに堅固なものになった。

近代の永遠の特徴である堅固なものの溶解は、新たな意味をもち、新しい目標に向けられることとなった。目標転換の最大の影響は、秩序や体制を政治問題化する力の崩壊に見られる。流動的近代であるいま、溶かされかけているのは、集団的な事業や集団的な行動において、かつて、個人個人のそれぞれの選択を結んでいたつながりである。

近代の新しい段階、個人の選択の自由、行動の自由を制限すると疑われる手枷、足枷がことごとく溶かされた結果生まれたと言える。つまり、秩序の硬直性は人間の自由が蓄積された結果であり産物である。

現在では、近代的溶解力の再配分、再分配がおこっている。溶解力の影響を最初にうけ

たのは、帰属だけによって決定される世襲財産のような伝統的制度、あるいは、行動の選択を制約する枠組みであり、相互依存の様々な形態、形式は再定義しなおされた。液化化の力は「体制」から「社会」へ、社会生活の「マクロ」から「ミクロ」段階へと降りようとしているのである。

3. リキッド・モダニティ社会の問題関心

バウマンのリキッド・モダニティ分析における問題関心をまとめると、以下のようになる。現在我々が不足しているのは、指針、道案内となる形式、法規、規制である。流動的近代の到来がもたらした人間的状況の変化は、体制が手の届かない存在となり、構造化されていない流動的な生活政治が全面的に出てきたことで、人間的状況は激しく変動した。そうすると、人間的状況を語るために使われていた古い概念も再検討を余儀なくされる。新しい形態をとり、変身することによって、これらは復活可能なのか、これが今の実践的問題であり、復活ができないのであれば、古い概念を埋葬するべきである。

バウマンは、人間がおかれた基本的な状況に関する概念のうち、ここでは解放、個人、時間・空間、仕事、共同体の意味、現実性の輪廻の可能性を探っている。また、近代とホロコーストでバウマンが述べていたように、根本にある問題関心は個人の道徳性を重視した社会の創設であり、このような社会理論の構築ははたして可能であるかということになるだろう。

4. リキッドモダニティの分析

ここではバウマンのリキッド・モダニティという本から見てとることができる、モダニティと、リキッド・モダニティとの根本変化について見ていくことにする。

第一の根本変化とは、モダニティ社会において真理を目指すような信念、(歴史の終焉と言う考え方や、ユートピア思想)が崩壊し、衰退していったことであり、近代社会における個人化が進んでいったことである。近代的ユートピア(よりよい社会の創造)の揺らぎの原因は、①世界を前進させる主体の明らかな欠如であり、②進むべき方向の欠如、③進歩の意味が極度に個人化したことである。

社会の個人化は、アイデンティティを社会によって与えられるものから、獲得するものへと変え、獲得にともなう生じる結果の責任を負わせることから生じたのである。現在では個人的関心の増大が以前より増して進み、共通利益としての市民性は浸食され、ゆっくりとした解体を続けており、個人的関心や興味の公的空間の占領が起きている。これはすなわち公的関心の矮小化を意味する。秩序を管理し、善悪の境界を監視していた公共領域(政治など)の解体が起きると、社会目的(価値理性)が喪失し、手段があっても目的のない社会になってしまったのだから、その代わりに個人が目標を設定しなければならな

くなくなってしまったのである。

個人化によって、欲求それ自身が個人の目標になり、欲望による消費社会の加速化、支配化が進み、消費社会によるアイデンティティの形成を余儀なくされるのである。自由な消費選択に基づく自由、大量生産商品の消費によるアイデンティティ形成の自由は、不安定、流動的な電子的イメージを通じて形成される。これは自由の再配分的手段にはなるが、抑制を取り払うような解放の媒介にはならないのである。よって、アイデンティティは協力と団結を誘発するような統一的状況よりも、分裂と過酷な競争という状況を作り出してしまふのである。

第二の特質すべき変化は、空間や時間の概念の変化である。都市生活が発展することによって現れた新たな空間は、公的でありながら、非市民的であるという、それぞれ矛盾しながら相互補完的な空間である。公的でありながら非市民的な空間の例を四つ挙げると、①嘔吐的空間と呼ばれ、ゲッターなどに見られるように、根本的に異端と見える他者との物理的接触が禁止された空間である。②食人的空間と呼ばれる、異質な肉体、精神を摂取し、摂取した人間との同一化を図るような空間。③非空間と呼ばれる、部外者の逗留を許しながら、彼らを無の社会的存在に変え、自我性を帳消しにするような空間。④空虚な空間と呼ばれる、意味を欠く空間である。①～④の共通特徴は相互関与を不要とし、共通の利益と目標を見知らぬものと分かち合う技術はめったに使用されなくなったことである。

そのかわりに、共通の利益を基礎にした交渉的な合意ではなく、共通のアイデンティティによって安定を見出すことが、最も効果的な物事の進め方として浮上したのである。このような新たに生まれた空間は、他者や、差異を切り離そうとする努力や、共同参加の必要性を排除する意思是、社会的絆の弱さ、流動性から生じる実存的不安への予想された反動であったといえとバウマンは考えている。

時間概念の変遷は、近代の開始にともない、時間が空間から解放され、時間の人間的想像力や技術力への従属、空間制服、領土拡大としての時間の利用がなされてきた。これ以降、時間や空間の概念は、一時的、経過的、動的なものとなったのである。これはすなわち重い近代から、軽い近代への移行を意味する。

重量資本主義時代の特徴として挙げられるのは、フォーディズムと呼ばれる大量生産・大量消費システムである。フォーディズムは産業化、蓄積、規制のすべてのモデルであり、「重い」「大きい」「非機動的」「固定的」近代を代表する産業形態であった。これに対して、軽量資本主義は、「軽い」「小さい」「機動的」「流動的」近代を代表する産業形態であり、時間性の支配の時代であり、資本と労働の解放の時代でもあった。これは、時間概念が、空間概念から解放された結果、時間概念が空間に根差さない脱土地化にともない、時間の瞬間性が到来した。これによって、人類の文化と倫理が解体を余儀なくされたのであるとバウマンは考えるのである。

産業形態の変化は仕事・労働の意義の変容にも見てとることができる。労働はそもそも、三面体的構造を持っているとバウマンは考え、それぞれ仕事の意義、仕事をする者たちの

階級形成、この階級に根差した政治を持っている。しかしながら、労働と生活の分離が起こり、労働の商品化・脱土地化が起これると、生産行動と生活行動一般が切り離される。その結果、仕事の意義が独立した現象として扱われるようになったのである。

重量資本主義時代においては、資本と労働が相互依存の原理で密接に連動し合う重厚な資本主義の時代であり、重い資本主義における時間軸は長く、長期的な精神構造を持っていた。つまり、労働の買い手と売り手は、長期間密接に結びついて離れず、総体的安定性を確保していたといえる。これに対して、軽量資本主義は、資本と労働の繋がりを緩め、資本の労働への非依存性から、脱場所化するという特性を持つ。また、時間と空間の概念の分離によって、軽量資本主義の時間軸は短くなり、短期的精神構造を持っている。現在の代表的なスローガンとして、柔軟性が挙げられるように、短期的、契約更新型の雇用、契約のない雇用がみられ、これによって人間が総体的不安定性へと陥るのである。

現代の不安定性というのは、個別化を進める強い力であり、連帯ではなく分断をもたらす。共通の利益は実質的な価値を持たないことを指す。連帯や協力が消費物化することによって、自分自身、他者、組織に対する信頼の欠如へと繋がっていくのである。

また、流動的近代における共同体は、変化しやすく一時的なものとなり、個人の欲求のガス抜きとしての、カーニヴァル型共同体と言われるタイプや、バラバラな個人の共通の興味に訴え、定期的関心を繋ぎとめるが、集団的関心に統合するようなことはないクローク型共同体と呼ばれるタイプに変化した。これらの共同体は人間の孤独を永久化し、個人化（道徳的最小主義）の流れを止めることはないだろうとバウマンは考えるのである。

バウマンは以上のような、リキッド・モダンの分析から、リキッド・ライフの分析へ入ることになる。リキッド・ライフとは、リキッド・モダン社会における生のあり方であり、不安定な生活や、絶え間ない不確実性のなかで生きることを指す。

4. 我々が取り組まなければならないこと

アンソニー・ギデンズは、「近代とは何か」という著作の中で、現代をハイ・モダニティと呼び、本来的にグローバル化していく傾向があると論じており、このグローバル化のもたらす不安定な帰結は、リスクと偶然性がいまだかつてない特質を呈するような事象世界を形作っていくと述べている。ハイ・モダニティを、ジャガーノートと通称される超大型トラック（人類が団結して或る程度乗りこなすことができるが、同時に突然操縦が効かなくなる恐れもあり、みずからバラバラに解体しかねないリスクを持ち、そうした巨大出力エンジンを備えて疾走する車）に喩えて、我々はこのジャガーノートをどの程度まで乗りこなす、つまり管理することができるのか、少なくともモダニティが我々にもたらす危険性を最小限にとどめ、好機を最大限に活かす形でこのジャガーノートを統率できるのかどうかは不明であるとギデンズは考える。

しかしながら、社会的知識の再帰性を通して、変わるべき未来を心に思い描き、その未

来像の宣伝をとおしてその実現を促進していくことができるかもしれない。必要なのは、「ユートピア的現実主義」の創造である。未来によせる期待は現在にとっての不可欠な要素となり、それゆえ、未来に寄せる期待は、未来が実際にどのように展開していくかにはね返っていく。つまり、ユートピア的現実主義は未来を知るための「窓」を開くことと、政治的未来が現時点において内在する現行の制度的傾向の分析とを結び付けていくのである。

ユートピア的現実主義の示すユートピアは、モダニティの持つ再帰性にとっても、時間性にとっても反対命題となる。ユートピアを予想し処方することは、モダニティの無限の可能性を秘めた特質を遮断するような将来の事態が、どのようになるかを規定していく。われわれは、この種の省察によってはじめて、非現実的な空論と現実的思考との結合を解消することができるようになるのであるとギデنزは結論づけるのである。

以上のように、バウマンの述べるリキッド・モダニティや、ギデنزの述べるハイ・モダニティは、近代初期における社会構造とは異なった、過去に事例はない、過去から断絶された新しい社会状況をもたらしたことは確実である。この新しい状況に対してどのように我々は対処すべきなのか。バウマンの述べるように、道徳的主体の確立を目指すべきなのか、それとも、ギデنزの述べるように、ユートピア的現実主義の創造を目指すべきなのであるのか。バウマンの述べる道徳的主体の構築とは、人間本位主義的な考え方を前提としている。また、人間本位主義の基本構造は基本的には宗教的なものであると、ノルベルト・ボルツは述べているように、バウマンの言う主張は、根本的には近代以前の過去に根差した見方であり、近代という新しい時代状況の到来によって失われてしまったものを取り戻そうとする見方であると言ってしまってよいだろう。それに対して、ギデنزは、未来志向の解答をしているように思える。つまり、ハイ・モダニティという社会は基本的には受け入れるしかなく、その中で現実的に未来を創造することによって、我々の将来が少しでも予測可能になるのであると考えるのである。両者の結論に相違はあるものの、我々が認識しなければならない重要なことは、我々は現在歴史的にみても新しい社会を生きしており、将来が不透明な社会を生きていることは間違いのないところである。

参考文献

ジグムント・バウマン

近代とホロコースト 大月書店

リキッド・モダニティ 大月書店

リキッド・ライフ 大月書店

バウマン社会理論の射程（ポストモダニティと倫理）中島道男 青弓社

ノルベルト・ボルツ

世界コミュニケーション 東京大学出版会

アンソニー・ギデンズ

近代とはいかなる時代か？ 而立書房